

〈原 著〉

『ツアラツストラ』影響下における漱石・龍之介の創作活動の検討
—ワーズワース詩集及び『坊ちゃん』『偷盗』の「天のがわ」を見据えて—

大友 泰司

The research of creative activities of Soseki and Ryunosuke under
the influence of “Zarathustra”
: Paying attention to the Wordsworth anthology and to the word “Milky Way”
in the literary works, *Bocchan* and *Chuutou*

Taishi OHTOMO*

Abstract

The author discovered that Kinnosuke (Soseki) Natsume had sympathized with the poetry of Wordsworth and that, he created the Tanka (a traditional style of Japanese poem), “Hoshi ochi-te sora ni koe ari, Ginga nagare-te yume ni iru” through the investigation of Kinnosuke’s Wordsworth collection of poems. In the present study, the description of the “Milky Way (in Japanese; Amanogawa or Ginga)” was discussed.

This description was included in both of the literary works “Bocchan (written by Kinnosuke Natsume)” and “Chuutou (written by Ryunosuke Akutagawa)”, and this played an important role in both works. Our study revealed that the “Milky Way” was something that enhanced the ultimate spiritual attainment of “salvation” in Kinnosuke, Wordsworth and Ryunosuke. I also noted that Kinnosuke and Ryunosuke created their literary works (“Bocchan” and “Chuutou”) under the influence of common spiritual attainment which was shown in “Zarathustra”.

Key words: the “Milky Way”

まえがき

著者の30年来の課題として「金之助とニーチェの関わり」を証明することであったが、そのはるかな想いは「夏目金之助、ニーチェとの出会い—『琴のそら音』を中心にして—(順天堂大学一般教養紀要, H8)に結実した。

この小論は、学内共同研究のテーマ「漱石・ニーチェ・龍之介『その生の把握』」へ密接に関わることの証明になろう。

Iでは、夏目金之助とワーズワースには、肉体に起因する苦悩があるという共通の「生の把握」がある。そして金之助はワーズワースに共感し、それによって「天の川」の意義と意味を深く理解していることを示した。IIでは、(厳密には)金之助『坊ちゃん』には、「救済の構図」があることを示した。III, IVに示す『偷盗』の主要テーマは、主人公・太郎と次郎等の救いである。太郎と次郎が死線をこえて救われていく経緯を『ツアラツストラ』等の影響下にあることを見据え、示した。Vでは、「生」の把握を軸にして本稿のまとめを記した。

* 日本文学 Japanese Literature

筆者は、芥川龍之介『偷盗』は未だ評価の定まっていない作品であると考えている。先行研究として三好行雄・越智治雄の論をはじめ、石割透、海老井英次等の研究があることも了解している。だが、龍之介のこの作品に対する卑下の評価の裏に「大いなる望み」が隠されている、と私は考えている。『偷盗』構想論を含め、作品を論ずる手がかりとすべく、「天の川」に着目し、この論考を進めていきたい。

I 夏目金之助、共感からワーズワースの詩集中に短歌を記す

夏目金之助には学生時代のアンソロジーによる習作論文「英国人の天地山川に対する観念」があり、その中で既にワーズワースについての要点を次のように把握している。

「ウオーズウオース」の自然を愛するは山峙ち雲飛ぶが為にあらず、水鳴り石響くが為にあらずして、其内部に一種命名すべからざる高尚純潔の靈気が、磅礴填充して、人間自然両者の底に潜むが為のみ。…(中略) …

玄の玄なるもの、万化と冥合し宇宙を包含して余りあり。 1)

この時点において金之助は、ワーズワースに対しかなりの共感を抱いていたように思う。

また、金之助には留学前に五高の校友会誌に寄せた「人生」と題する小論がある。そこには、己の特異な「生」についても陳べられている。

蓋し人は夢を見るものなり(中略)而も人生の真相は半ば此夢中であって隠約たるものなり。(中略)天災とは人意の如何ともすべからざるもの。人間の行為は両親の制裁を受け、意思の主宰に従う。一挙一動皆責任あり、固より洪水飢饉と日を同じうして論ずべきにあらねど、良心は普段の主権者にあらず、四肢必ずしも吾意思の欲する所に従わず。(中略)

不測の変外界に起こり、思いがけぬ心は心の底より出で来る。容赦なく且乱暴に出で来る。海嘯と震災は沓に三陸と濃尾に起こるの

みにあらず。亦自家三寸の丹田中にあり、陰呑なる哉。 五校校友会誌「人生」 2)

このように如何ともし難く「陰呑なる」自己の認識を持つ金之助は、ロンドンに於いて、再び書物の上でワーズワースとの対話を持った。このことは、自己の問題解決のための学習を、公の英文学の研究と並行して精力的に行ったであろうことを示していよう。それらの学習対象の一つが、ニーチェでありワーズワースであった。

ここに東北大学図書館蔵の『Poems of Wordsworth』(前扉に購入メモがあり、K. Natumeの署名とFeb. 6. 1901の日付け)の中にThe Complaint of a Forsaken Indian Woman (P. 51~P. 53)という詩がある。それは、次のとおり。

When a Northern Indian
Before I see another day
Oh let my body die away.
In sleep I heard the northern gleams;
The stars were mingled with my dreams;
In rustling conflict through the skies.
I heard, I saw the flashes drive,
And yet they are upon my eyes
And yet I am alive;
Before I see another day,
Oh let my body die away.

星落ちて空に声あり 銀河流れて夢に入る
注：gleam；かすかな光（きらめき・ひらめき）
rusting；サラサラと音がする（鳴る）

金之助の原本には、小題のWhen以下の文にアンダーラインが引かれ、3行目のIn sleep以下4, 5, 6行目までアンダーラインが施されている。そして、「星落ちて」の句は、縦書きで英詩の右側余白に、記されている。

Complaintには、不平・苦情の一種・告訴・病気等の意味があり、内容的にNorthern Indianの限定があっても、(邪悪な)肉体よ亡んでしまえ、(そうすると)『高尚純潔の靈気が(中略)人間自然両者の底に潜む』事に気づく—ということになり、この詩が金之助の「人生」の内容と同類のものがあると観て取れよう。また、「星落ちて」の句も併せて記されていることから、この句が元

なって『坊ちゃん』の「天の川」の記述はある、と考えられる。

ここに金之助の「人生」に於いて自己の問題を開示し、ワーズワースの「The Complaint」によって啓発を受け、「星落ちて空に声あり 銀河流れて夢に入る」の句が生まれた。そしてそれが、『坊ちゃん』の中の「天の川」の叙述に展開され、坊ちゃんの心理の自然性を「人間普通の哲理」と言える程までに止揚し、この小説に深みを付与している。

II 『坊ちゃん』の「救済の構図」

「天の川」は、夏目金之助『坊ちゃん』八の章末に

金や威力や理屈で人間の心が買えるものなら、高利貸しでも巡査でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭位な論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働らくものだ。論法で働らくものじゃない。

「あなたの云う事は尤もですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断ります。考えたって同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。 (傍線筆者)

というかたちで見出すことが出来る。『坊ちゃん』は明治39年(1906)に「ホトトギス」に発表されている。

そして、筆者の論で『琴のそら音』(明治38年9月発刊)が、ニーチェ「Zarathustraは斯くかたりき」(以下『ツアラツストラ』と省略)と密接な関わりがあることを指摘した。また共同研究の書誌調査では、金之助蔵書の英訳版『ツアラツストラ』の中に書き込みを入れながら、彼がそれを読んでいることを確認している。

それ故『坊ちゃん』の伏流には『ツアラツストラ』があることを銘記しなければなるまい。

そこで『坊ちゃん』八、の章末での「天の川」の使われ方は、『同』他の章末と比較すると大きく異なっているので確認しよう。

妙な顔をして互に眼と眼を見合わせている。

赤シャツ自身は苦しうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。只気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云ったら蒼い顔を益蒼くした。 『坊ちゃん』〔六〕

ここでは、自然描写は用いられていない。『同』〔七〕を見てみると

踝をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈りの頭から顎のあたりまで、会釈もなく照らす。男はあっと小声に云ったが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促すが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは凶太くて誤魔化す積か、気が弱くて名乗り損なったのかしら。所が狭くて困ってるのは、おればかりではなかった。

(傍線筆者)

とあって、同様に自然描写は用いられていない。しかし「月は一照らす」の一文は、ニーチェとの関わりにおいて重要な意味をもっていることを指摘しなければなるまい。「ひかり」は、それらの中で「正義・救い」を示唆し、東洋では特に「月・月光」は真如、真理を表わすからである。そしてこれに先立って「正義・救い」や、「願いをかなえてくれる聖なる存在」を示すものとして「観音様」が設定されている。つまり

一うつくしい人が不人情で、冬瓜の水脹れの様な古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だと思った山嵐は生徒を煽動したと云うし。(中略)いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ替ったり——どう考えても宛にならない。(中略)。箱根の向うだから化物が寄り合ってるんだと云うかも知れない。

おれは(中略)、此所へ来てから一カ月立つか、立たないうちに、急に世の中を物騒に思い出した。(中略)。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡って野芹川の堤へ出た。(中略)、土手に沿うて十二丁程下ると相生村へ出る。村には観音様がある。

『同』七 (傍線筆者)

という形で観ることが出来る。また『琴のそら音』「漢水は依然として西南に流れるのが千古の法則だ」に見るように、中国通の金之助には、「石橋」は天台山国清寺の所にあつて、橋を渡っている最中に一念の邪念でも持てば三千丈の谷底へ落ちてしまうという伝説の橋が意識され、「浄」の価値が付加されている。そして「化物が寄り合つて」居る所から、邪念を打ち払って石橋を渡り、観音様のある村へ行く—という事がその意義をもつ。さらには、『偷盗』においても「救い」を示唆する章段六に醜悪・邪悪に対する「聖」なる場の設定として「石橋」が用いられている。

ところで、〔八〕の事件の顛末にて、坊ちゃんは「この様子ではわる者は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲ってるんで」と、赤シャツを疑ひだし、「迷ってる矢先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者だと極めてしまった」と断定した。ところが、その赤シャツから俸給を上げてやろうという話を持ちかけられた坊ちゃんは、うらなり君の古賀の転任が有つて、彼の俸給の一部を転用して俸給を上げるということを知り、その申し出を断ろうとしている。その理由を「全く赤シャツの作略だね。よくない仕打ちだ。まるで欺撃ですね」、「卑怯」だからと考えている。このような想いが心底まで達してしまった坊ちゃんには「何時もなら、相手がこう云う巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違つたかと恐れ入つて引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない」と、不退転の覚悟を提示する。

だから先(赤シャツ)がどれ程うまく論理的に弁論を逞くしようとも、堂々たる教頭流に俺を遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。…

など、坊ちゃんは諸々のことを思い巡らした結果、「人間は好き嫌いで働らくものだ。論法で働らくものじゃない」と言う結論にたどり着く。その結論を胸に事件に片をつけるべく、

「あなたの云う事は尤もですが、僕は増給が

いやになったんですから、まあ断ります。

考えたつて同じ事です。さようなら」と云ひすてて門を出た。

と行動する。そして坊ちゃんにとって、このような行動をとることが天命であり自然である、という意味で「頭の上には天の川が一筋かかっている」と記されるのである。

この「頭の上には天の川が…」という表現は、単純な自然描写ではなく「人間は好き嫌いで働くものだ」という金之助流の心理の自然性を「人間普遍の哲理」にまで止揚した言葉になっている。

Ⅲ 『偷盗』登場人物達の「生」の苦悩・自己否定と死へのおもひ

龍之介の『偷盗』七の章末に「天の河」は、次のように述べられる。「しんとした夜は、唯馬蹄の響きに笈をかえして、二人の上の空には涼しい天の河がかかっている。」と。ここに於いても『坊ちゃん』八、と同様にある事件の落着後に、事件に対する批評を決定的なものにする自然描写・風景描写が用いられている。ここでの事件とは、物語の主人公・太郎と次郎が、死線をのり越えて戦つた後に得られた静かな「安息」・救済の場の描写である。具体的に示すならば、

犬は、空しく次郎の脛布を食いちぎつて、うずまく獣の波の中へ、まっさかさまに落ちて行つた。が、次郎は、それをうつくしい夢のように、うっとりした眼でながめていた。彼の眼には、天も見えなければ、地も見えない。唯、彼を抱いている兄の顔が、一半面に月の光をあびて、じつと行く手を見つめている兄の顔が、やさしく、厳かに映っている。彼は、限りない安息が、徐に心を満たして来るのを感じた。母の膝を離れてから、何年にも感じた事のない、静かな、しかも力強い安息である。—

「兄さん」

馬上にある事も忘れたように、次郎はその時、しかと兄を抱くと、うれしそうに微笑しながら、頬を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙をおとしたのである。

この部分のあとに、「天の河」の一文が続く。しかし、この「涼しい天の河」とは妙な感じのすることばである。つまり、「涼しい」と思っているのは、太郎か次郎か、または一頭の馬に乗っている太郎と次郎なのか、はたまた作者龍之介の「ある」感懐と解釈すべきなのか、不明だからである。しかし、その謎を解く鍵は、『偷盗』の冒頭部分に在ると考えられる。そして、この冒頭部は主題へと導く序章になっている。すなわち、

むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家々の上をオオいかぶさった、七月の或日さかりである。男の足をとめた辻には、枝の疎な、ひょろ長い葉柳が一本、この頃流行る疫病にでも罹ったかと思う姿で、形ばかりの影を地の上に落しているが、此処にさえ、その日に乾いた葉を動かそうと云う風はない。まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせい、人通りも今は一しきりとだえて、唯さっき通った牛車の轍が長々とうねっているばかり、その車の輪にひかれた、小さな蛇も、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をぴくぴくやっていたが、何時か脂ぎった腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないようになってしまった。どこもかしこも、炎天の埃を浴びたこの町の辻で、僅かに一滴の湿り気を点じたものがあるとすれば、それはこの蛇の切れ口から出た、腥腐れ水ばかりであろう。

とあって、ここには一点の「涼味」もなく、蒸し暑く、埃っぽい風景の中、主人公太郎が猪熊のお婆を呼び止めるところから、この小説は始まっていく。

引用文中に、「車の輪にひかれた小さな蛇」も「鱗一つ動かさないようになってしまった」とあるところは、独文学ヘルマン・ヘッセが『車輪の下』で示した、運命にもてあそばされたものの末路を象徴的に示していると考えられる。また、イメージ的にも『ツアラツストラ』の毒蛇の章（毒蛇が咽喉につまって瀕死の苦しみをあじわうという点に於いて）とも、或る意味で響きあっていくと指摘できよう。

前出の引用文に続いて、老婆が登場するが、彼女は盗賊の連中に「集まるのは羅生門、時刻は亥の上刻」と触れ回る。これにより『偷盗』のこの物語は、時間と事件が、午後の日盛りから真夜中へと流れていく。この時間（事件）の設定は、芥川の構想メモ「真夜中に何か起きる」とあることに符合している。さらに夏目金之助との関わりで指摘するならば、『琴のそら音』のプロットの流れを形成する「不安の心理」がある。この部分の時間設定は、夜の時間（更）が主となっていて『偷盗』と共通している。強く言えば、龍之介は金之助のニーチェ『ツアラツストラ』の引用方法をも併せて『琴のそら音』を手本にしていたものと考えられる。

さて、本論においては、『偷盗』の中心人物である太郎と次郎の關係に着目していくことにする。そこで、婆は太郎に向かって「お前さんは、不相変疑り深いね。だから、娘に嫌われるのさ。嫉妬にも、程があるよ」と言う。続けて「そんな事じゃ、しっかりしないと、次郎さんに（沙金を）取られてしまうよ。…」と言った。それに対し、太郎は「わかっているわ」と答え「忌々しそうに柳の根へ唾を吐いた」と著され、小説[一]では太郎と次郎は、双方とも想いを寄せる沙金とすることが原因で、兄弟仲が悪くなっていくことが表されていく。

[三]は太郎の心理、想い回想を主に据えた章段である。特に本文の（ ）内に示された太郎の告白は、心の機微を語る重要な部分である。加えて、疫病に倒れ死にゆく女を犬が襲うなどという事件を内蔵し、荒れ果てた都を背景にして、太郎は不快を抱き、恐れ（己はすべてを失う時が来たのかもしれない。…）と死を思っている。具体的には、

沙金を次郎に奪われると云う惧れは、漸く目の前に迫って来た。あの女が、一現在養父にさへ、身を任かせたあの女が、…

とあり、さらに沙金を想うあまり、彼女の複雑な男關係に苦悶している。

あの女の肌は、大ぜいの男を知っているかも知れない。けれども、あの女の心は、己だけ

が占有している。そうだ、女の操は、体にはない。(中略)一兎も角もそう思うと、己の苦しい心は幾分か楽になった。しかし、あの女と養父との関係は、それとちがう。

己は、それを感じた時に、何とも云えず、不快だった。

さらに

こう思えば、次郎と沙金とが、近づくようになるのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、己には苦痛である。(中略) そうなれば、落ち着く所は、今から予めわかっている。弟を殺すか、己が殺されるか。…

太郎は、死人の臭いが鋭く鼻を打ったのに、驚いた。(中略)

太郎は、目のあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした。

と述べられていく。

太郎の「生」と苦痛は、「醜い魂と美しい肉身を持った人間」沙金と共にある。沙金が太郎の肉親・弟次郎に、奪われようとするとき、太郎は「己の二十年の生涯は、沙金のあの眼の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までの己を失うのと、変わりはない。沙金を失い、弟を失い、そうしてそれと共に己自身も失ってしまう。己はすべてを失う時が来たのかも知れない。…」と思い、眼に涙を浮かべるのである。

太郎のこの思いは、『ツアラツストラ』第三部、「後の舞踏の歌」に対応している。その概要は、「生を通常の意味で追求すれば逃げて行く。認識の果てに生と認識者との悲しい相愛。そして苦や死を包摂しての生の永遠讃歌がひびく」—手塚富雄訳『ツアラツストラ』—である。試みに「後の舞踏の歌」3)–p. 362の冒頭部を参照してみる。

さきごろわたしはおまえの目に見入った。お、お、生よ。おまえの目の夜の中に、わたしは黄金がきらめくのを見た、一私の胸はそれを見るよろこびに鼓動をとめた。

この他の部分も参照してみると、龍之介は『ツアラツストラ』に対してかなり忠実な対応をしていることが判る。

〔四〕は次郎が中心となって展開される。次郎

について、太郎は告白の中で「己と弟とは、気だてが変っているようで、実は見かけ程、変っていない。(中略)醜い、隻眼の己が、今まで沙金の心をつらえていたとすれば、それは己の魂の力に相違ない。そうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、己に変わりなく持っている」と語り、「同魂」、「同魂の力」を持つ兄弟であることを強調する。

次郎も太郎同様に「何で自分は、こう苦しまなければ、ならないのであろう」と苦しんでいる。その原因は「沙金に恋をしている。が、同時に憎んでもいる」—ここでも同『ツアラツストラ』「後の舞踏の歌」3)–p. 363に対応している—ことによる。そして次郎は、思いの中で「あの女に会うたびに、始終兄にすまないと思っている。(中略)そうして、沙金に会うと—今度は自分が、折角の決心を忘れてしまう。が、その度に、自分はどの位、自分自身を責めた事であろう」さらに、「どんな死に様をするにしても、兄の手にかかれれば、本望だ。いや、寧ろ、この頃の苦しみよりは、一思いに死んだ方が、どの位仕合わせだかわからない」とさえ思っている。

次郎の苦しみも、沙金との激しい恋と、兄への慮いと共にある。次郎の、女が持つべき貞操観と兄のそれとは、違っており「その違いが、余計二人の仲を悪くする」と次郎は考えている。そうして、太郎と次郎は兄弟滅亡への激しい過流の中へと巻き込まれていく。

—そんな事がわかったら、妾は、(中略)—太郎さんに殺されてしまうじゃないの」

その切れ切れな語と共に、次郎の心には、自ら絶望的な勇気が、湧いて来る。(中略)。

彼等は二人とも、その握りあう手の中に、恐ろしい承諾の意を感じたのである。

〔五〕では、とくに太郎と次郎の関係において進展はない。しかし『偷盗』を論ずる場合には欠かすことのできない章段なので、稿を改めて考察する。

IV 『偷盗』の救済の示唆とその構図

〔六〕は『偷盗』全般にわたって、示唆的な章

段となっている。

その一文を示せば

…時鳥の外に、何も無い。もしその中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなものの声が聞こえるとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内陣で、金泥も緑青も所斑な、孔雀明王の画像を前に、常灯明の光をたのむ参籠の人々か、さもなくば、四条五条の橋の下で短夜を芥火の影に偷む、乞食法師の群れであろう。(傍線筆者)

特に、文中の孔雀明王は、毒蛇を食らう孔雀が人格化され、衆生救済の仏として知られる。

ここでは、孔雀明王と冒頭の車輪にひかれた蛇とニーチェ『ツアラツストラ』毒蛇の章との関わりを想起させる。そして人間の喉につまった毒蛇ゆえに苦しむ人を、孔雀明王が救ってくれることを、暗示している。

さらに「その時(中略)、羅生門のほわりには、時ならない弦打ちの音が、(中略)互いに呼びつ答えつして(中略)、次第に何処からか、つどって来た」と示す。羅生門は太郎の心の置き場所としてあり、迷ったりした時には、「何処へ行こう」(中略)「ままよ羅生門へ行って、日の暮れるのも待とう」[四]とする所でもある。そこで「弦打ちの音」が響きあう—ということに意味がある。民俗学的研究から、この音は招魂の儀式として認定されている。したがって、同魂の男達太郎と次郎のかかわりに於いて読み込むならば、沙金のせいでバラバラになってしまった太郎の魂と次郎の魂が、互いに呼びつ答えつして、集ってくる—となる。

[六]の情景描写的な示唆的文章の後には、太郎と次郎の生死をかけた必死の戦いぶりが示されていく。すなわち、

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀を揮いながら、小路を(中略)下るともなく下って来た。(中略)折からの月の光に、往来は、(中略)明るくなっている。一次郎は、そのなかで、人と犬とに四方を囲まれながら、必死になって、斬りむすんだ。[七]

その必死の有様は「恰も太刀に使われる人」となって、「相手の太刀を受け止めて、それを向こうへ斬返ししながら、足もとを襲おうとする犬を、突嗟に横へかわしてしまう。—

—彼は、この働きを殆同時にした」というものであった。この、同時の働きを、言葉を変えて言うならばショーペンハウエルの「盲目的生への意志による行動」の意味に理解することができる。龍之介の意中には漱石・ニーチェ等のことがあったと考えられるからである。

そして、次郎はこれらの行為を繰り返しながらも、次第に追いつめられ野犬が人肉を奪い合っている中、究極の場へと追い込まれていく。

「どうせ死ぬのなら一思いに死んだほうがいい」彼は、そう心に叫んで、潔く目をつぶったが、喉を噛もうとする犬の息が、暖かく顔へかかると、思わず又、目を開いて、横なぐりに太刀をふるった。何度それを繰り返したか、わからない。しかし、その中に、腕の力が、次第に衰えてきたのであろう、打つ太刀が、一太刀毎に重くなった。今では踏む足さえ危うくなった。云々。

そしてとうとう、「左の太腿に、鋭い牙の立つのを感じた。—その時…夜の底から、かまびすしい犬の声を押しして遙かにカツカツたる馬蹄の音が、風のように空へあがり始めた。」—一方の太郎は、「晴々した微笑を、口角に漂わせながら、昂然として、馬を駆って」いた。そして、「辻を曲がった彼は、行く手の月の中に…群がる犬の数を尽くして」集まっている中に、唯一人太刀をかざしている人、すなわち次郎の姿を見た。…「次郎か」…「太郎は、我を忘れて、叫びながら—、弟を見た。

この時からの、太郎と次郎が兄弟愛に目覚める過程の心情を綴る、芥川の文章を次に示す。「月」「月の光」「電光」などは、ニーチェ『ツアラツストラ』のなかで「救い」を示唆するキーワードであるが、それを織り込んで結末を表す文章に仕立て上げている。

すると忽ち又、彼の唇を衝いて、なつかしい語が、溢れてきた。「弟」である。肉身の、

忘れる事の出来ない「弟」である。太郎は、緊く手綱を握った儘、血相を変えて歯噛みをした。この語の前には、一切の分別が眼底を払って、消えてしまう。弟か沙金かの、選択を強いられた訳ではない。直下にこの語が電光の如く彼の心を打ったのである。彼は空も見なかった。路も見なかった。月は猶更眼に入らなかった。唯見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂気の如く、弟の名を口外に投げると、…太郎は惨として暗くなった顔に、隻眼を火の如くかがやかせながら、再、元来た方へまっしぐらに汗馬を跳らせていたのである。…怪しく熱している隻眼に、次郎は、殆ど憎悪に近い愛が、一今まで知らなかった、不思議な愛が燃え立っているのを見たのである。

(中略)一馬の頭が、鬣に月の光を払って、三度向きを変えた時、次郎は既に馬背にあって、ひしと兄の胸を抱いていた。

言うまでもなく、一頭の馬に同魂の男達・太郎と次郎と一緒に乗っていることに、重大な意味がある。そして、この引用文の後にはⅢに示した冒頭部分につながっていき、太郎と次郎の締め括りは「天の河」となる。すなわち

二人は静に馬を進めて行った。兄も黙っていたら、弟も口をきかない。しんとした夜は、唯馬蹄の響きに銜をかえして、二人の上の空には涼しい天の河がかかっている。

ここに於いて「涼しい天の河」は、『坊ちゃん』八の章末の「天の川」と同様の意味が付されている。『坊ちゃん』の場合には、金之助のワーズワースへの共感があって「天の川」の意味があるが、『偷盗』では「安堵・安息」の象徴としてあり、太郎と次郎が兄弟愛に目覚めるのが当然の帰結である、と理解できる。この相違はワーズワースも含めて、ニーチェ、漱石、龍之介の「その生の把握」のしかたの違いであろう。

V 「生」の把握を含み) まとめ

漱石等を通じわれわれに大きな精神的影響を及ぼしたニーチェの思想は、ショーペンハウアーの

厭世観を克服しようとする試みとして展開される。因みに、ショーペンハウアーの厭世観は仏教思想の影響下、ニーチェの『ツアラツストラ』は拝火教の影響下にある。本稿では、夏目漱石と芥川龍之介がニーチェの影響のもと創作活動をしていることをみてきた。

「生」について、仏教的な観点では世界苦そのものである「生」をショーペンハウアーは「盲目なる意志」、ニーチェは「権力 (Macht) への意志」、と呼んでいるが、漱石も龍之介も西洋の思想界を経由することによって問題として把握された「生」に向き合うことになる。ニーチェはニヒリズムの超克を説き、漱石は「神経」による厭世観⁴⁾、龍之介は「漠然とした不安」を言う。

本稿では、ニーチェが『ツアラツストラ』で提起した「生」を、漱石と龍之介がどのように把握して創作活動を行ってきたかを、みてきた。

この度、学内共同研究として「漱石・ニーチェ・龍之介『その生の把握』」が認められた。今回の発表は、その研究成果の一端である。書誌調査にあたって協力して下さった東北大学図書館の皆様にお礼を申し上げます。また、共同研究にあってドイツ文献のご教示を頂いた鎌田輝男氏にも名を記しお礼を申し上げます。

参考文献

- 夏目漱石『琴のそら音』漱石全集 二 岩波書店
 夏目漱石『坊ちゃん』漱石全集 二 岩波書店
 夏目漱石『英国詩人の天地山川に対する観念』漱石全集 十三 同 1)-p. 56
 夏目漱石「人生」漱石全集 十六 同 2)-p. 12
 芥川龍之介『偷盗』新潮文庫
 ニーチェ『ツアラツストラ』—手塚富雄訳—中公文庫 3)-p. 362, 363
 懸田克窮『病的性格』中公新書 4)-p. 16
 越智治雄『漱石と文明』砂子屋書房
 海老井英次『芥川龍之介論攷』桜楓社

(平成16年10月12日 受付)
 (平成16年12月22日 受理)